島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第22巻—第2号　127～132頁　昭和63年12月

自己不安への一接近

——Higgins の自己差異理論を通して——

堤　　雅　雄*

Masao TSUTSUMI

An Approach to the Self Anxiety

——Through the Medium of Higgins' Self-Discrepancy Theory——

序

我々は一見自明にして，かつ極めて漠然とした自己感覚に漂って生きている。しかもこの自己感覚は，その基底に常に他者という契機をはらんでいる。このことは，我々の自己が次の2つの位相を有するを意味する。1つは「内化された他者」あるいは自己化された他者，いま1つは「外化された自己」あるいは他者化された自己のそれである。前者はフロイトが超自我として記述したもの，即ち良心や自我理想に対応し，後者はクーリィのいう鏡映自己に対応する。

これら「自分が自分であること」の感覚に潜む他者性は，自一他の関係が親和的である限りは同化されて，意識化されることも少ない。しかし自我発達の過程はこの様な素朴で平和な境位をいつまでもは許さない。自己の内なる他者性への覚醒は発達上の必然であり，これに伴う他者性の異化ないし「仮面」化は様々な精神内力動を生起する。

先ずそれは，「自分が自分であること」そのものを根底から揺さぶる。その端的な現れの1つが羞恥感情である（堤，1983）。この動揺がさらに進めば，人格内部に亀裂を生じることとなる。内沼（1978）は，精神分裂病を「他人が地獄となる」病理，そう鬱病を「自分が地獄となる」病理，そして対人恐怖症を「自分も他人もともに地獄となる」病理と呼んだが，そこでいう「他人」とは，現前の他者であると同時に，あるいはそれ以上に観念的存在としての「内化された他者」であり，「自分」とは「外化された自己」であると解することができよう。いずれにしろそこには現前の他者と自己との，そして内なる他者と自己との間のいたたまれないほどの疎隔感が示唆されている。

James（1891）以来，心理学の歴史の中で，自己に関する重要な議論は幾たびか現れてきたが，定量的検証にはなじみがたく，実証主義の枠組みの中ではさほどの展開はみられなかった。その中で例えばフロイト的精神分析理論は，イドに衝き動かされる自我と，それを看つめるいま一つの自分，即ち超自我との間の葛藤の力学を主題としていたとみることができる。また，人間学派と称される Rogers（1951）は，環境との相互作用，特に他者との評価的な相互作用の結果として形成された自己概念あるいは「自己構造」が，有機体的な諸欲求に基づく経験の知覚を大きく規定すること，即ち自己構造と矛盾するような経験は象徴化を拒否されるか，あるいは歪曲された上で受け入れられるという機制を主たる命題としている。そして，このように「あるがままの自己」と自己概念との間に不一致が生じている状態を，Rogers は心理的不適応事態とみなしている。この考えを検証するために，彼の学派は治療過程のクライエントの自己知覚の変容，及び自己と理想自己との関係を実証的にとらえ，カウンセリングによって自己知覚が理想自己に近付く方向で大きく変容することを示した。この意味では，「現実の自己」と「理想の自己」とのずれ（discrepancy）が精神的健康度の指標となりうる（Rogers, 1951, Rogers & Dymond, 1954）。

また一方で，治療者たる側の要件の第一として，「あるがままの自己」の受容，即ち，自己像と経験の一致（con-

* 島根大学教育学部教育心理研究室

gruence) を求めている。この一致性は同時に「健康な人格」の主たる要件でもある。

この種の議論で問題となるのは，「あるがままの自己」などと呼ばれる自己の真実性をどこに求めるかである。一般には自分自身にとってさえ不可視な「真の自己」を，外在的にどのように捉えようというのか。厳密な意味では不可知論に陥るこの問題を，実証的心理学，例えば社会心理学の領域では，「社会的自己」ないしは「公的自己」のリアリティのなかにみいだそうとしていると思われる。

近年，対象化された種々の自己の間のずれ (discrepancy) の問題に焦点を当て研究を進めているHigginsは，自己認知の諸側面を，次の2次元，即ち3つの領域（現実の自己；actual self，理想の自己；ideal self，かくあるべき自己；ought self）と2つの立脚点（自分にとっての；own，他者にとっての；other）の組合せによって記述し，これらの自己間のずれが2種の対照的な情動を生起するとみなした (Higgins, 1987)。つまり自分にとっての現実の自己と理想の自己とのずれ，及び自分にとっての現実の自己と他者にとっての理想の自己のずれが，落胆や恥，当惑といった沈鬱的情動を，自分にとっての現実の自己と他者にとってのあるべき自己とのずれ，及び自分にとっての現実の自己と他者にとってのあるべき自己とのずれが，恐れや罪責感といった焦燥的情動を引き起こすと考えた。Higgins らはこの考えを実験的に検証し，これを支持する結果を得たとしている (Higgins, Bond, Klein & Strauman, 1986)。また，Strauman & Higgins (1987) は，自分にとっての現実自己と他者にとってのあるべき自己との差異が，SAD や FNE, HSCL の下位尺度 I（対人感受性尺度）といった対人不安尺度と有意な相関を示す一方，自分にとっての現実自己と自分にとっての理想自己との差異が，BDI や HSCL-D(抑鬱性尺度）といった抑鬱性尺度と相関をもち，両者は互いに独立であることを示した。

先に述べたように，自己の内なる他者への意識と，他者の内なる自己への意識の同時的覚醒，及びその帰結としての両者の差異の意識化は，西欧文化以上に日本の，特に青年の文化に親和的であり，我々の羞恥心性や対人不安心性の機制の理解にとって極めて重要な意味をもつと考えられる。本研究では，このような文脈に Higgins のいう自己差異理論 (self-discrepancy theory) を位置づけ，彼らが見いだした事実関係を再検証してみたい。

方　　法

被 験 者

被験者は地方国立大学教育学部の青年心理学受講生，147名。うち不完全回答者12名を除き，分析の対象とした者は男子45名，女子90名，計135名であった。

質 問 紙

質問紙は以下の3部門からなる。

自己質問表 (selves questionnaire)；今回は，自己認知の水準として次の4つ，自分にとっての現実自己 (actual/own, 以下 AS と略記)，自分にとっての理想自己 (ideal/own, IS)，他者にとっての現実自己 (actual/other, AO)，他者にとっての理想自己(ideal/other, IO) を取り上げた。具体的な設問の型は以下の通り。

AS；「あなたは自分自身についてどのように思っていますか。自分から見た実際のあなたについてお答えください。」

IS；「あなたはどのような自分でありたいと思いますか。あなたの理想とする自分についてお答え下さい。」

AO；「あなたは周りの人からどのように見られていると思いますか。他者から見られた実際のあなたについてお答え下さい。」

IO；「あなたは周囲の人からどのような人間であってほしいと思われているでしょうか。周りの人の期待する自分についてお答え下さい。」

なお，Higgins の用いた「かくあるべき自己 (ought self)」については，理想自己（かくありたい自己）との区別がつきにくいであろうこと，質問項目が多量になること，などから今回は省略した。元々あるべき自己の意識については，宗教的倫理意識の強い西欧人に比して，日本の現代青年には比較的希薄であろうことが予想される。

以上の自己の4水準のそれぞれについて，長島らの作成した self-differential scale(長島，藤原，原野，斉藤，堀，1963) のうち，第1因子から第5因子まで，それぞれ4，5，3，1，1の計14項目の負荷量の高い形容詞対を選んで構成した自己質問票に答えてもらう。なお各項目は，対照的な意味内容の形容詞対を両極に，どちらともいえない，わからないを中点とした7ポイント尺度となっている。得点化にあたっては，社会的望ましさに沿って，－3から＋3の値に変換される。

対人不安尺度；対人不安傾向性については，小川，永井，白石，林 (1979) の対人不安質問票をもとに，因子負荷量の高い項目を中心に第1因子から8項目，第2因子，第3因子からそれぞれ4項目の計16項目を抽出し，

縮小版を構成した。各項目は，非常にあてはまる（4）から全くあてはまらない（1）までの4ポイント尺度となっている。

ホプキンス症候チェックリスト(HSCL-I & D)；Derogatis, Lipman, Uhlenhuth & Covi (1974) の HSCL についてはこれを翻訳し，Strauman らにならってその2つの下位尺度，対人的感受性尺度(HSCL-I)の7項目，及び抑鬱性尺度（HSCL-D）の11項目から評定値の高いもの7項目，計14項目を抽出してランダムに配列した。各項目とも，非常にあてはまる（4）から全くあてはまらない（1）までの4ポイント尺度となっている。

結果と考察

自己質問票；4つの水準の自己についての評定の平均値を，肯定的―否定的の方向性の不明確な2項目を除く12項目について求めると，1項目あたり AS；0.25, AO；0.51, IS；1.66, IO；1.39で，理想自己は現実自己よりいずれも肯定的であるが，自分にとっての自己と他者にとっての自己の間は一様でない。以下の分析では，4つの自己の間の差の絶対値(AS－AO, AS－IO, AS－IS）を個人指標にとり，他の尺度との関連をみていく。

対人不安尺度；男女別に因子分析を行った結果を表1に示す。いずれも第2因子までで80%弱の累積寄与率を示し，バリマックス回転の結果，男子の第2因子と女子の第1因子を構成する項目群が,「集団の中にとけ込めない」,「人との交際が苦手である」などの8項目でほぼ一致し，男子の第1因子と女子の第2因子を構成する項目群もまた同様に,「気分の動揺が激しい」,「ひとに会うときに，自分の顔つきや眼つきがそのひとに悪い印象を与

表1　対人不安尺度及びHSCL（I＋D）の因子分析結果

対人不安尺度

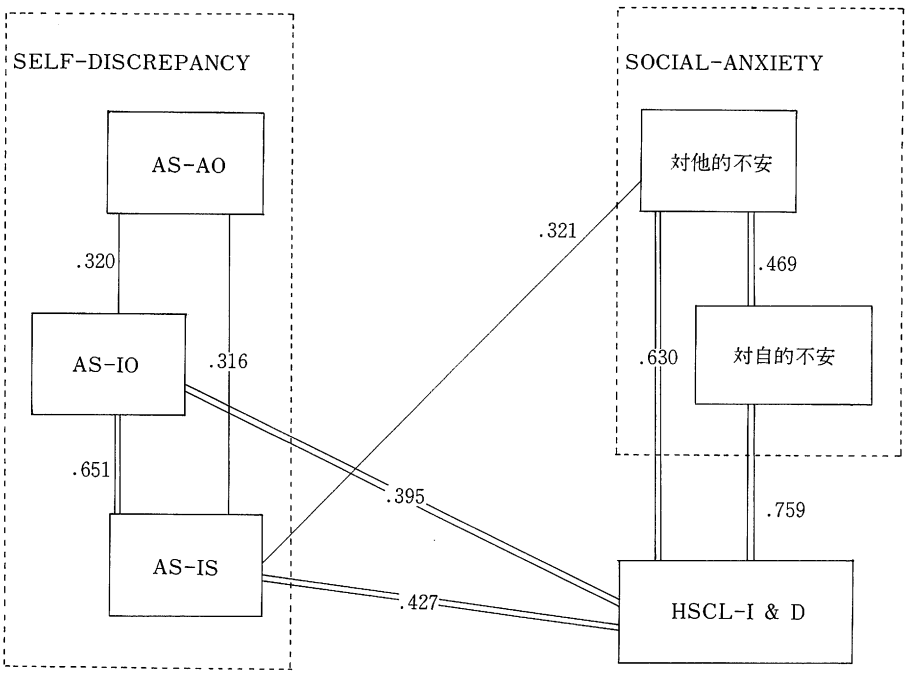
	男子 固有値	男子 因子寄与率	女子 固有値	女子 因子寄与率
第1因子	5.975	56.08	5.382	56.68
第2因子	2.128	19.98	2.192	23.08
第3因子	1.011	9.48	1.409	14.83

HSCL（I＋D）

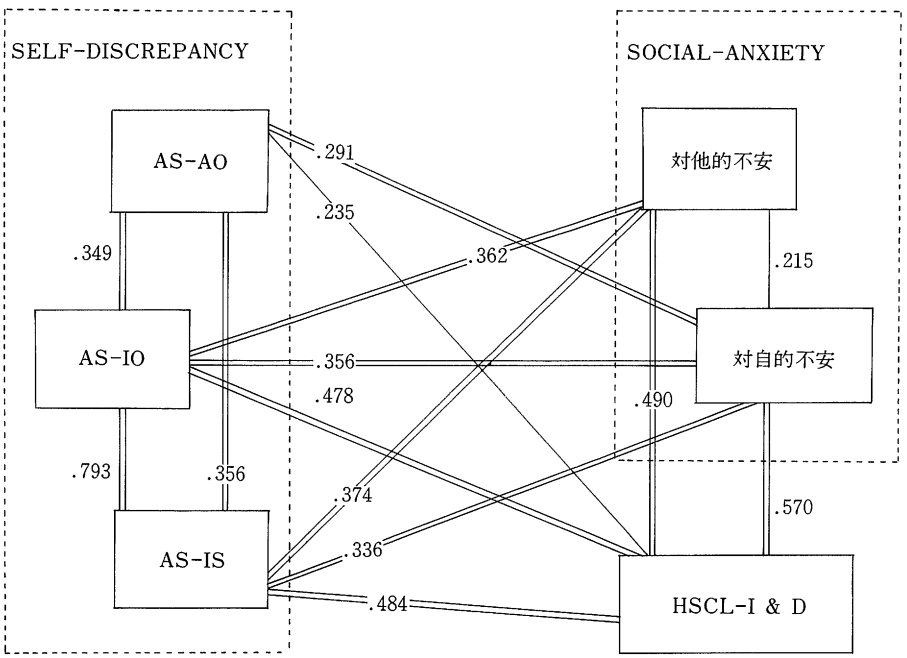
	男子 固有値	男子 因子寄与率	女子 固有値	女子 因子寄与率
第1因子	4.427	61.49	4.704	73.00
第2因子	1.211	16.81	0.940	14.59

表2　各変数の男女毎の1項目あたりの平均値，及び標準偏差

	男子(n＝45)		女子(n＝90)		
	MEAN	S D	MEAN	S D	MAX-MIN
対人不安(対他的不安)	1.822	0.547	2.038	0.596	4－1
対人不安(対自的不安)	2.196	0.659	2.214	0.544	4－1
HSCL-I&D	1.784	0.411	1.975	0.457	4－1
AS－AO	0.689	0.364	0.751	0.362	6－0
AS－IO	1.395	0.473	1.488	0.606	6－0
AS－IS	1.544	0.480	1.603	0.635	6－0



男子（n＝45）



女子（n＝90）

図1　各測度間の相関関係　—：$p<.05$，＝：$p<.01$

えているのではないかと不安になることがある」などの6項目で一致した。残りの2項目は男女で傾向が異なった。前者の項目群は，その意味内容から対他的自己不安，後者は対自的自己不安と名付け得る。以下，前者に対応する8項目，後者に対応する6項目の合計値を各被験者の個人指標として扱い，他の2項目は不算項目として処理する。

HSCL-I & D；HSCL-I & Dの因子分析の結果は表2の通り。尺度構成にあたって前提にしたDerogatisらの2因子構造は，今回の結果では見いだせなかった。男女とも第1因子の重みが非常に大きく，しかもそれを構成する項目群は彼らのいう2つの因子が混在していた。それ故今回は全体を1因子とみなし，14項目の総計値をHSCLの個人指標として用いることとした。

以上，6つの指標それぞれの男女毎の平均値及び標準偏差を，1項目あたりに換算して表2に示す。性差がみとめられたのは対他的不安（t=2.024），HSCL-I & D（t=2.348）の2測度だけで，いずれも女子のほうが男子より5％水準で有意に高かった（df=133）。この2つの測度は，ともに対他意識に関係することから，他者に見られる意識は，男子に比べ女子のほうが高かったと思われる。

各個人指標間の相関関係

4つの自己の間の差異得点，3指標と，4つの情動傾性との相互関係を見るために，ピアスンの相関係数rを算出した。結果を図1に示す。

先ず，3つの自己差異得点相互の内部相関はいずれも有意であった。特に〈AS－IO〉と〈AS－IS〉の相関はかなり高く，〈AS－AO〉を恒常にした1次の偏相関でも，男子で.611，女子で.765と高い値を示した（1％水準で有意）。これはIOとISの相関の高さをほぼそのまま反映したものと思われる。つまり理想自己は，ほぼ他者の期待に沿った方向で形作られていると受けとめられる。一方，〈AS－AO〉と他の2つとの間にみられた相関は，互いに他を恒常とした一次の偏相関では，〈AS－AO〉と〈AS－IO〉で男子.158，女子.118，〈AS－AO〉と〈AS－IS〉で.150と.141と低く，有意ではなかった。他者から見られているであろう現実の自己（AO）は理想自己に沿った方向性をもつが，2つの理想自己間の関係は分かちがたく重なりあっていることになる。

次に情動傾性相互の関係をみてみると，ここでも3者の相関はすべて有意であった。今回用いた対人不安尺度と，対人感受性と抑鬱性の2つの下位尺度からなるHSCLとはかなりの相関関係を有する結果となった（対他的不安とHSCLの1次の偏相関pr=.480，.460，対自的不安とHSCLの偏相関pr=.679，.566で，いずれも男女とも1％水準で有意）。

本研究の主題である，自己間のずれと否定的情動傾性との関係はいかに。

現実の自己に対する自他の認知のずれの意識（AS－AO）は，男子では情動傾性との有意な相関はみられなかったのに対し，女子では対自的不安とHSCLとに対し有意な，しかしやや低い相関を示した（r=.291，p<.01，r=.235，p<.05）。現実自己に対する他者のまなざしの意識は，全体的に，自己の内にそれほど大きな動揺を生じないようである。

これに対し，理想自己に関わる自他の意識はかなり大きく関係してくる。

まず，現実自己と他者から望まれているであろう理想自己のずれ（AS－IO）は，男子ではHSCLと，女子では2つの対人不安尺度とHSCLのすべてに対し，1％水準で有意な相関を示した。また現実自己と理想自己の間の自己内でのずれ（AS－IS）も，男子の対自的不安との間を除き，すべてに有意な相関が認められた。

この様に，現実自己と理想自己のずれの意識は，対人不安や抑鬱感情とかなり大きな関りを有すると考えられるが，その際の，理想自己に関わる自己と他者の2つの視点（ISとIO）は，いずれがより本質的なものといえるだろうか。上に述べたAS－IOとAS－ISとにからむ相関を，互いに他を恒常にした偏相関を算出して再吟味してみた。その結果，いずれの場合も偏相関値は小さくなり，有意水準も低くなるが，全般に〈AS－IS〉のほうが〈AS－IO〉より高い値をとる。このことに，他者が望んでいるであろう自己像より自分が目指す理想の自己像のほうがより直接的であり，重要性も高いが，同時に，両者の関係は密接で，他者の期待を媒介に理想の自己が形成されるであろうことが示唆されている。

全体的考察

本研究では，4水準の自己認知間のずれを3つの自己差異得点で表し，これらと対人不安傾向及び抑鬱性傾向といった自己不安に関する2つの尺度との相関関係をみてみた。その結果，自分にとっての現実自己（AS）とのずれは，他者にとっての現実自己（AO）とよりは，自他にとっての理想自己（IS，IO）との間で大きく，2つの自己不安傾性尺度との相関も，現実自己における自他のずれ（AS－AO）に対してはさほどみられず，現実自己と理想自己とのずれ（AS－IS，AS－IO）との間に強く現れた。

このことは，異なる自己間のずれの大きさそのものが対人不安や抑鬱傾向と関係し，しかもこのずれの大きさは自他の視点のいずれかに関わりなく，現実自己と理想自己との間で大であることを示している。しかし，これが直ちに，自己にとっての他者存在の重要性を否定することにはならない。理想自己とのずれの意識の背後には，自己の視点と匹敵する他者のまなざしが介在していることもまた事実であるからである。

なお今回は，ought self に関してはいくつかの理由でとりあげなかったが，理想自己との関係では Higgins の予測した方向，即ち現実自己とのずれが重要な他者の落胆や不満足を想起させ，結果的に恥や当惑，落込み感といった沈鬱的(dejection-related)情動を生じるという考えを部分的ながら支持するものであったと受け止められる。

最後に，この種のアプローチが常にはらんでいる問題性に触れておきたい。その1つは被験者の質問紙に対する反応のリアリティの問題，いま1つは評定値間の差をそのまま個人指標に用いることの精神測定法上の問題である。これらの点に関しては更なる検討が必要である。

考 考 文 献

Derogatis, L. R., Lipman, R. S., Uhlenhuth, E. H., & Covi, L., The Hopkins symptom checklist (HSCL) : A self-report symptom inventory. *Behavioral Science*, 19, 1-15, 1974.

Higgins, E. T., Self-discrepancy : A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340, 1987.

Higgins, E. T., Bond, R. N., Klein, R. & Strauman, T., Self-discrepancies and emotional vulnerability : How magnitude, accessibility, and type of discrepancy influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 5-15, 1986.

James, W., *Psychology*. New York : World, 1891. (今田恵訳，心理学，岩波書店，1939).

長島貞夫，藤原喜悦，原野広太郎，斉藤耕二，堀洋道，自我と適応の関係についての研究(2)——Self-differential の作製——．東京教育大学教育学部紀要，13，59-84，1967.

小川棲之，永井撤，白石秀人，林洋一，対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(2)——(a)地域性および(b)幼少期における家族以外の成員との接触，非接触の観点から——．横浜国立大学教育学部紀要，19，221-239，1979.

Rogers, C. R., *Client-centered therapy*. Houghton-Mifflin Co., 1956. (伊藤博編訳，パースナリティ理論，ロージャズ全集8巻，岩崎学術出版社，1967).

Rogers, C. R., & Dymond, R. F. (Eds.), *Psychotherapy and personality change*. Univ. of Chicago Press, 1954.(友田不二男編訳，パースナリティの変化，ロージャズ全集13巻，岩崎学術出版社)

Strauman, T. J., & Higgins, E. T., Vulnerability to specific kinds of chronic emotional problems as a function of self-discrepancies. Unpublished manuscript, New York University, 1987. (Higgins, 1987による)

堤雅雄，羞恥論への予備的考察，島根大学教育学部紀要（人文・社会科学），17，1-7，1983.

内沼幸雄，対人恐怖の人間学：恥・罪・善悪の彼岸，弘文堂，1978.